創刊8000号記念特別インタヴュー

小澤征爾

日本の音楽界と「音楽の友」を語る

取材・文=中東生
Text=Shinobu Naka

6月13日、「小澤征爾、パリでヘルニアの緊急手術のため、ウィーン・フィル定期演奏会をキャンセル！」というニュースが世界を駆け抜けた。1週間の療養後、マエストロはジュネーヴ近郊の街、ロールで開催されたスイス国際音楽アカデミーに姿を見せ、若い音楽家の指導にあたっていた。術後間もない6月24日、本誌のためにインタヴューに応じてくれた。

800th Aniversary Issue
Special Interview

Seiji Ozawa talks about the passed days and the ONGAKU-NO-TOMO

やっぱりね、当時は相当生意気だったと思うんですよね

――最初に、小澤さんと『音楽の友』（以下、『音友』）の関わりについて、お聞かせ下さい。

小澤（以下O） 僕はね、あんまり覚えてないんですよね。不勉強で恥ずかしいんだけど……、学生時代に『音友』を読んでいたと思うんだけど、もともとあまり本読まないんですよ。その後、僕外国行っちゃったでしょう。外国に出てから、今年でもう50年になるんだけれど、日本でマンガが流行ったのも全然知らなくて、電車の中で背広着たサラリーマンがマンガ雑誌を読んでるの、あれ、僕には理解できないの。僕はまだ『サザエさん』とか『とどろき先生（がやってきた）』とか『のらくろ』とかの時代だからね。その後の流行が抜けちゃってるんですよ。だからその間は『音友』ともあまり縁がなかったの。でも日本に帰るようになって……、『音友』の人が送ってくれたのかなあ、毎号届くの。

――2001～2002年にかけて、お嬢さんの征良さんにも連載『征良の小さな時間』をご執筆頂きました。

O あ～、それはもう読まされた。読まないと家族扱いされないからね（笑）。

――いかがでしたか。

O なかなかよかったと思う。僕が『音友』を読むようになったのは、日本人アーティストのことがよく解ったから。松本でサイトウ・キネン・フェスティバルを始める時に、いろんなフェスティヴァルがあったじゃない、霧島とか草津とか。ああいうのも『音友』でずいぶん勉強させてもらった。その場へはなかなか行けないからね。遠山一行先生からも「これを読め！」って言われたりして……。

――小さな記事を除けば、小澤さんの『音友』デビューは1961年のようです。

O ああ、それは僕がN響にボイコットされたからじゃないかな。東京新聞の学芸部に横溝正史の息子がいて、成城学園の先輩なんだけどね、『N響の黒い霧』というロマンチックな名前で、3面の最初にバーッって真っ先に書いてくれて、それで僕、有名になったんだよ。

実はね、僕の海外生活が50年経ったっていうんでね、NHKがこの間から、ニューヨークやボストン、ウィーン……、あっちこっちにやって来て、僕にインタヴューをしてるんだよ。それでね、「私達には避けて通れない」って、N響事件（編集部注：小澤が指揮することになっていた1962年12月のN響定期演奏会を、同響団員たちがボイコットした）のことなんかも、すごく細かいことまでよく調べて来ていてね。どういう人が何を話したとか、僕が何を言ったとか、言わなかったとか。面白かった。「なるほど歴史ってこういうものなのかな」ってね。

――いま振り返ってみると、どうですか。

O 当時は本当に大変だったけれど、やっぱりね、相当生意気だったと思うんですよね。「この馬鹿野郎！　もう日本なんか絶対帰らない。もう日本では仕事しない」なんてニューヨークのマネジャーに言ったの。それなのに翌年帰って来たんだけどさ（笑）。偉そうなこと言っていたけれど、心のどこかでは「しまった、生意気だった……」と思ってたんだね。〝アメリカナイズ〟という言葉は当時、特に芸術の世界ではネガティヴな意味合いで使われていたんだけれど、よく言われていたから、「なるほど、そうなのかな」って少しは解って、「N響事件」がかえって大チャンスになったね。

それから、日本で逆に成功していたら、僕ずっと日本で暮らしていたと思う。僕、日本大好きだし、食い物好きで、親父もお袋もいて、友達もたくさんいて、外国語も下手だから、外国行くの嫌で、行かなかったと思う。でも、あれをきっかけに、「日本に帰らずにこっちでやる」って言われたマネジャーのウィルフォードが、コロンビアの社長やってた人なんだけど、彼も必死になってくれて、それでラヴィニアっていうシカゴ響の夏のフェスティヴァルで振るはずだったジョルジュ・プレートルが肩を壊して指揮できなかったんで、そこに僕が行って、それですぐ音楽監督に呼ばれたの。それをきっかけにトロントに行けたし、お陰でサンフランシスコに来て、またそのお陰で、ボストン響のタングルウッドっていう、やっぱり夏の音楽監督を2年間やって、3年目にボストン響の音楽監督になれて29年いたんだもの。それも全部出だしは「N響事件」なんですよ（笑）。あの頃、僕英語できなかったから……。外国でやるっていうのは、僕にとって相当嫌なことだったんだと思う。それで、逃げて、逃げていたんだと思うんです。

インタヴューは6月24日、スイス国際音楽アカデミーが開催されていたスイスはジュネーヴ近郊のロールで行われた

――神様の愛のムチですね。

O 愛のムチだね、あれは（笑）。当時は評判、うんと悪かったからね。小田急線に乗っていられなかったよ。「なんかすごい悪い奴が乗っている」みたいな目でまわりの人たちが見てさ。アメリカナイズで、練習に遅れて、振り間違えて、それでN響なんて日本でトップのオーケストラの指揮者をやっている生意気な奴、っていう目で見られるものから、なんだか外に行くの嫌だったよ。

――ご両親も大変だったでしょう。

O それが面白くてね、親父はすごく太っ腹な男で、「人の物を盗んだり、人を傷つけたりしたんじゃないんだから。俺はお前を応援している。そんなこと、恥ずかしがることはない」って言っていたのね。お袋なんかどう思っていたか知らないけど。それから僕のラグビーの仲間なんかは、これ幸いと、「お前は他で何も食わしてもらえないだろうから、俺たちが食わしてやる」って、精養軒なんてところに呼んでくれてね、飯食ったりね。なんか、新橋の焼き鳥屋なんかで食っても、なんか変な目で見られるの。そういう時、新聞が凄く悪く書くからさ、3面にこんな長い記事でさあ。

それでも1カ月くらい後の1月15日に、武満さんとか、黛さんとか、大江健三郎さんとか、三島由紀夫さんとか、井上靖さんとか、彼は結婚の時の仲人だから、その時は結婚したてでね、しょうがないから出て来て、日比谷公会堂で『小澤征爾の指揮を聴く会』っていうのをやったんですよ。その1年くらい後は、武道館で《第九》をやってくれてね。信じられない！　武道館って広いのよ。それがいっぱいになったんだからすごいよね。後にも先にも1回だけよ、あんなところで指揮したのは。

――オーケストラは日本フィルですよね。

O　そう、日本フィルの連中も一生懸命バックアップしてくれてね。N響への対抗意識もあったかもね、意外と。

ロールのスイス国際音楽アカデミー事務局で。同アカデミーでは優秀な若手演奏家によるクァルテットを小澤征爾、今井信子、原田禎夫らが熱心に指導していた(※P137～139の関連記事も合わせてお読み下さい)

そういうのって、音楽の場合は、『音友』が一番やってくれるんじゃないの？

――普通だったらそれで潰れてしまうような事件なのに、それをバネにできたのは、なぜだったのでしょう。

O　何もわかってなかったんじゃないですか、やっぱり。いま見たらね、NHKと喧嘩するっていうのはね、日本にいたら普通考えないね。NHKの一番上の人訴えちゃったんだもん。N響を訴えようと思ったら、誰だか解らないんですよ。考えてみれば、N響っていうのはNHKのオーケストラで、その一番上に会長がいるのよ。しかもその人、僕のことが大好きで、奥さんと3人で東南アジアに旅行なんかしたのね。いっつも一緒にご飯食べてて、「小澤くん、小澤くん」って言ってくれて、「その人を訴えるのは忍びないんだけど……」って書いて、訴えた。そうしたらもう、激怒したらしい。それですごく堅くなっちゃったんだけど、結局、なんか間に人が入って、帝国ホテルのすごい大きな部屋で、いろんな立会人のもとで和解。1年くらい後じゃないかな……もっと後かな。

――最後に、『音友』に求めることは何かありますか。

O　うん、この頃思うんだけどね、僕、メジャー・リーグ大好きなのね。今までね、僕はボストンにいたから、日本に帰るとね、英字新聞を買わないと、全然戦況を知ることができなかったのよ。それがね、野茂やイチローが来たお陰で、それから、2人の松井に松坂、もちろん、今は岡島とか斉藤とかも来たでしょ。そうしたらさ、日本の新聞や雑誌でメジャー・リーグがよく解るようになったの。昔と大違い（笑）。日本の新聞にもボストン発の記事が載っていて、ボストンの日本人記者がメジャー・リーグのニュースを書いてるの。そういうのって、音楽の場合は、『音友』が一番やってくれるんじゃないの？　これからだって……そうじゃない？

僕が出た頃は、東洋人はあと中国人の歌い手がいただけで、誰もいなかったのよ。今はほら、大野君とか広上君とか下野君とか大植君とか……、指揮者だけじゃなくてピアノでも、光子さん（内田光子）は一番上だけど、桃さん（児玉桃）が出たり、小菅優さんとか上原彩子さんとか、そういう人たちの外国での活躍を伝えると、お客さんが外国の音楽界と、少し近くなれるんじゃない？　日本に来る人のことは書くけど、日本人が外でやっているのはあんまり出ないもんね。僕の場合は、武満徹さんの曲をやった時だけちょこっと出たけどね（笑）。

●

「天下のマエストロ小澤」ではなく、音楽を愛してやまない、少年のような小澤さんの懐の深さが、心の中に温かいぬくもりとなってずっと余韻を残し続けているような、素晴らしいひと時だった。